

巻頭言「大学の紀要」

学長 新谷 光二

紀要は大学の顔である。紀要を見れば、その内容がいかに千変万化であろうとも、そこから総体が見えてくるからである。

紀要は大学の研究水準を示す。今日点検評価がかまびすしい学界にあって、それを為すならまず紀要について評価すべきであろう。

紀要は過去と未来を繋ぐ一里塚である。とくに開学50周年を迎え、新体制で歩まんとする本学にとって、この紀要は到達点であると同時に輝かしい将来を展望するものであってほしい。

紀要は研究者執筆者どうしの交流の場である。専門分野の違う各人がお互いを知り、助言し合う意味は大変大きなものがある。

紀要は情報発信の場である。今日開かれた大学として研究成果は広く一般社会に還元されなければならない。

紀要は自己満足であってはならない。ここに発表された成果を踏まえて、さらにブラッシュアップした形で国際的評価に耐えるものに行きたい。

紀要は積読であってはならない。これは何も紀要に限ったことではないが、特に専門家の所論には目を通さずに終わる事が多い。最低アブストラクトには目を通すことが執筆者への礼儀でもあろう。

紀要を毛嫌いしてはならない。現代人は最小の努力で最大の効果を挙げようとするあまり、発行部数の少ない配布範囲の限られる紀要には書かないことを方針とする向きがある。しかし得てしてそのような研究者は学会のジャーナルなどにも書いていない場合もある。

紀要の諸相を思うままに書いた。これらに則って、北星学園女子短期大学紀要第38号（この紀要名での最終号）が用いられんことを祈って筆を擱く。